

好みの献立に投票

福島養源小学校（宮田英治校長）では1月26日、選挙の仕組みを学び、学校給食への関心を高めるため「給食総選挙」が実施されました。

全校児童と職員144人が給食の献立を政党に見立て、「長崎和牛党（牛丼）」、「長崎マダイ党（そばろ丼）」、「長崎地鶏党（照り焼き丼）」のいずれかに1票を投じ、6年生が開票。当選した長崎和牛党のメニューが、3月16日の給食に出される予定です。

投票結果は下記のとおりです。

【和牛党】90票 【マダイ党】30票 【地鶏党】24票



佐賀玄海ボーイズ全国大会へ

第51回記念日本少年野球春季全国大会（硬式野球）に出場する松浦市の中学生6人が1月14日、市役所を訪れました。

山下璃恭さん（鷹島中）、丸山朝陽さん（鷹島中）、廣島咲介さん（志佐中）、山下大翔さん（志佐中）、熊本理人さん（調川中）、松下凜也さん（福島中）の6人は、佐賀県玄海町にある佐賀玄海ボーイズに所属し、厳しい練習に取り組んでいます。主将を務める山下璃恭さんは「一つずつ勝って、優勝を目指したい」と力強く抱負を述べました。

左から熊本さん、山下大翔さん、丸山さん、山下璃恭さん、廣島さん、松下さん



松浦市産品戦略にかかる「愛称」と「ロゴ」が決定しました！

問 地域経済活性化課観光物産係 ☎内線 210

市が進めている「松浦市産品戦略推進事業」で、産品戦略を展開していく際に使用する愛称とロゴが決定しました。

愛称は、全国に公募し、応募があった238作品の中から、高知県高知市の藤内さんの「松浦の極み」に決定し、愛称をもとにロゴを製作しました。

今後は、生産者に広く活用していただくとともに、これらを使ったツール（のぼり、紙袋など）を製作し、物産展等のイベントや商談会などで活用していきます。

<愛称>

松浦の極み（まつうらのきわみ）

愛称の説明＝松浦のこれぞという逸品を取り揃えたものという意味。

応募者 高知県高知市 藤内 直仁（会社員・男性・57歳）

<ロゴ>

説明：松浦の「松」のシルエットと「極」の漢字を掛け合わせたマーク。

<戦略産品>

- ・農産品：松浦アールスメロン、松浦キンショーメロン、御厨ぶどう
- ・水産品：アジ、サバ、トラフグ
- ・加工品：おさんじ、アジフライ、青島かまぼこ、いりこ、旬さば缶、石工品



北海道福島町と人事交流研修が行われました。

福島町から松浦市へ

福島町役場 総務課所属

舟根 顕さん

思い起こすと約1年前、自動車とフェリーを使って松浦市へ引越す際、想像以上に距離があり、慣れない道の運転に不安を覚え、北海道と異なる景色に感動を覚えながら松浦市にたどり着いたことを鮮明に覚えています。

赴任当初は、気候や言葉、文化、地域性など全てにおいて北海道とは異なり、戸惑うことばかりの生活が続きましたが、皆さまが優しく接してくださるおかげで充実した毎日を送ることができました。

業務では、水産課で水産業の振興・普及や水産加工品の販売促進などを担当しました。水産担当部署での経験がなく、初めてのことでばかりで、勉強になりました。「アジの水揚量日本一」、「養殖トラフグの生産量日本一」を誇り、「アジフライの聖地」として魅力を発信する松浦市で、重要な基幹産業の業務に携わることができ、貴重な経験となりました。

今回の交流は、新型コロナウイルス感染症が流行する中、制限や困難もありましたが、松浦市で過ごしし仕事をするのが自分の成長にもつながり、より多

くを学ぶことができたと感じています。

1年間の松浦市での経験は、かけがえないものとなりました。皆さまに温かく支えられながら過ごした日々は、一生忘れることはありません。この「ご恩」と「ご縁」を大切にし、今後の両市町の交流がより良いものになるための架け橋となり、発展に寄与できるよう頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。



①第6回ふるさとチョイス大感謝祭オンラインの様子（前列中央）

②小学校で水産教室の司会を務める（左）

松浦市から福島町へ

松浦市役所 政策企画課所属

金井田 誠悟さん

北海道福島町では1年間、産業課商工観光係で、観光や特産品振興の業務に携わりました。

横綱千代の山・千代の富士記念館でのツアーガイドやグラスボートで岩部海岸を周遊する岩部クルーズの運営業務サポートなど、福島町の魅力をさまざまな形で発信する役割の一端を担わせていただきました。

今回、北海道の派遣職員として私を手を挙げた理由は、主に二つあります。

一つめは、「北海道のように人として大きくになりたい」と思ったからです。しかし、1年間、北海道で暮らしてみても人として大きくなれたのか、成長できたのかはわかりませんが、この貴重な経験はこれからの人生で役に立つことは間違いありません。

二つめは、別の視点から物事を見てみたいと思ったからです。文化も方言も環境も違う、なにもかも新鮮な場所で生活することで、今までの当たり前が当たり前でなくなり、より多くのことを勉強できたと思います。

21年間生きてきた中でたった1年ですが、私を最も成長させた1年になっ

たことは間違いありません。たくさんのお世話になった方々への恩を忘れずに、福島町で過ごした日々を忘れずに頑張ります。そして、これからも友好市町の交流が続くように、心から願っています。

本当にありがとうございました。



③岩部クルーズ（後列中央）
④横綱記念館ツアーガイド
⑤クロソイ放流